

Japa

コロナ禍×イノベーション×地方創生

Newsletter

2021年8月1日 #17

編集発行人：Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

発行元：Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>

INDEX

1. コラム「論点提起」：信頼の根拠や如何
2. キュレーション「関連情報&Topics」：コロナ禍×イノベーション×地方創生
3. 寄稿：芸術・建築・歴史・ランドスケープが一体となったフランスの魅力
(田中徳壽 建築家 DPLG FRANCE 元北海道東海大学芸術工学部教授)
4. 稽古照今・寄稿：たのし歌謡談義 その3 (作詞・作曲家 高橋育郎)
5. 解説：なぜ、不祥事は繰り返されるのか、「失敗」とは
6. Blog 仕組みの群像：不都合な事実の諸相
7. 「Japa 新型コロナウイルス感染症特設コーナー」からの pickup 情報
8. 読者の声
9. Japa 及び連携団体からのご案内
10. つばやき (編集後記に代えて)

注：担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人 (芝原 靖典) による。

※ 本 Newsletter は、Japa 日本専門家活動協会が毎月1日に発行する会員向けの Newsletter です。現在は、コロナ禍を勘案し、Japa 会員以外の関心者の方々にも無料配信しています。

※ 本 Newsletter は、双方向型の意見交換・交流等をめざしています。Newsletter の各コーナーの内容に関するご意見、執筆者・寄稿者との交流希望等をお寄せください。

Japa 会員募集中！

Japa は、より多くの方々が発見し、交流・連携・共創できることをめざして、新たに「一般会員」(年会費3千円)枠を設けました。入会金無料のいま、ぜひ、入会のご検討を賜れば幸甚に存じます。

入会に関するお問い合わせ・申込先：Japa 事務局 info@japa.fellowlink.co.jp

1. コラム「論点提起」：信頼の根拠や如何

今年に入っても、大企業の組織的な検査不正、資格不正が相次いでいる。これらはいずれも品質不正等につながるものであり、エンドユーザーの安全性に関わる不祥事である。それ以前にも、自動車メーカーの出荷検査不正、建設会社の杭打ちデータ改竄、素材メーカーの品質データ改竄、免震・制振機器メーカーの検査データ改竄、ハウスメーカーの型式認定外建築・資格不正取得等々、上げればきりが無い。大企業という「規模だけの基準」で信頼性が担保されている保証はない。

- ▼レクサス販売店で車検不正、現場疲弊で繰り返す不祥事の構図 2021. 7. 21 日経ビジネス <https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00304/072100013/>
- ▼三菱電機、絶つことできない不正の根 悪質で深刻、自浄作用なし！ 2021年07月21日 16時45分 J-CAST <https://bit.ly/3rCykUf>
- ▼パナソニックコンシューマーマーケティング（株）による技術検定の実務経験不備等について 令和3年7月16日 国土交通省 <https://bit.ly/3BDEx77>
- ▼JIS規定と異なる試験を25年間実施、日本軽金属がアルミ板製品で検査不正 品質不正問題 2021年05月18日 08時00分 MONOist <https://bit.ly/3iKqZ0r>
- ▼品質不正(2020年7月17日以前の一覧) 日本経済新聞 <https://s.nikkei.com/3ib0VLF>
- ▼品質不正企業リスト (一社)ディレクトフォース <https://bit.ly/2UYwyRL>

加えて、2021年7月12日に放映されたNHK「逆転人生」を観ていたら、中小企業(従業員20人、年商23億円)が開発した「空調服」を訴える製造委託先の中堅企業(従業員420人、年商260億円)による知財権訴訟が紹介されていた。企業規模の格差を利用したこうした事象は昔からよく聞く話で、いまだに続いていたのかと再認識させられた。しかも、その訴訟は一番で敗訴した原告の中堅企業が控訴した二審の知財高裁(裁判官は知財高裁所長)での判決予定日に自ら控訴を取り下げている。

- ▼逆転人生「夏に涼しさ革命を！ ファン付き作業服」、NHK オンデマンド <https://www.nhk-ondemand.jp/goods/G2021114627SA000/index.html>
- ▼あのヒット商品にパクリ騒動が…？ 「空調服」裁判の意外な結末 中小企業も他人事ではない「危うい決断」 現代ビジネス 2020.07.13 <https://bit.ly/3kRtcud>
- ▼NHK「逆転人生」放送に関するご報告 2021年7月13日 株式会社サンエス <https://www.sun-s.jp/news/img/news210713.pdf>

翻って、現下のコロナウィルスの感染拡大阻止に大きく貢献しているコロナワクチン開発において、超大手企業ファイザー社とベンチャー企業のビオンテック社は完全なパートナーとしてワクチン開発を行っている。(詳細は、仕組みの群像 <https://bit.ly/3i6huu2> を参照)

いまや、企業・組織等の「信用」はその規模にあるのではなく、個々が有する真の創発力・技術力・マネジメント力によるべきであり、その関係も元請・下請構造ではなく、対等なパートナー関係であるべきである。それなくして、オープンイノベーションなど机上の空論である。いまだ、外形的な規模指標にこだわる日本がはたしてそうした状況から脱皮できるか如何。

2. キュレーション「関連情報&Topics」：コロナ禍×イノベーション×地方創生

▼【なぜ、日本は非常時対応が鈍いのか？】三菱総研理事長・小宮山 宏の「有事への対応は『自律・分散・協調』体制で」 2021-07-06 財界 ONLINE <https://bit.ly/3xdtwGa>
雑誌「財界」主幹による元東大総長（現三菱総合研究所 理事長）の小宮山氏へのインタビュー記事である。コロナ禍対応において、「日本は伝統的な対策に依存して、科学的対応に失敗したのだと思う」。そして、提唱してきた「課題先進国 日本」の対応として「社会全体の有り様の見直し」が必要であり、その具体が「自律・分散・協調」と解く。その一つの例として、多くの研究者と研究施設やノウハウなどの研究インフラと豊富な資金力を持つファイザーと、ガン研究のためにmRNAの技術を開発していたビオンテック両社の提携(新結合)を挙げている。確かに、非常時は、平時に自律・分散していたものを「必死になって」的確にガバナンスすることにより、協調(新結合)する良い機会である。非常時の「協調」は、「新結合」すなわちイノベーションの機会と気付かされた。さらに、次の経済を引っ張るキーワードは、「地球環境と格差」であり、変革のスピードにより生じる混乱を回避するには「やはり教育」であり、新しい仕事につけるように転職を助太刀するべきだがそれを「国がやろうとすると失敗するんですよ。第一、非効率です。それを民間にやらせて、成果に応じて金を払うみたいなやり方。やり方はいろいろあるけれども、そういう賢い転職の助太刀、それが鍵になると思います」とのこと。行政主導型ではなく、民間主導型で進め、そこに行政が協力（あるいは協調）に回るような仕組みの方が急激な時代環境変化への適応力(レジリエンス)が高まるのではないだろうか。こうした観点から、また、じっくり意見交換をしたいものである。

▼コロナ危機が暴いた日本の没落 日本総合研究所会長・寺島実郎氏 月刊日本 2021年07月03日 日刊SPA! <https://nikkan-spa.jp/1763990>

こちらは、(一財)日本総合研究所<注:(株)日本総合研究所とは異なる独立系シンクタンク>の会長へのインタビュー記事である。今年5月末で「コロナ500日」を総括する必要があり、「重要なことは、コロナがあぶり出した日本の構造的な課題だということ」で、「今の日本には物事の本質や全体像を体系的・構造的に捉える『全体知』や課題解決のための『総合エンジニアリング力』が決定的に欠落している現実が暴かれた」と云う認識に立って、論理的にそしてデータに基づき具体的に論述している。「わずか四半世紀のうちに世界経済における日本経済の存在感は3分の1に圧縮されてしまった」「ワクチン開発の遅れ、MRJ（三菱リージョナルジェット、現MSJ）の挫折、基幹産業のメルトダウン、さらに言えば東日本大震災からの復興の歪み、アベノミクスへの耽溺、コロナ禍での迷走、これらの問題の根源はいずれも総合エンジニアリング力、構想力の欠如なのです。これこそが東日本大震災から10年、コロナ500日の今、日本人が肝に銘じるべき教訓です。」「外交構想力の欠如も深刻です。」「我々日本人は誰かが助けしてくれることを願うのではなく、自ら知を錬磨していかなければなりません」。まさに「日本の埋没」からいかに抜け出すか、一人ひとりが考え行動することが要請されている。確かに、良い原材料、部材等は供給できるが、最終製品を供給できない昨今の日本の現状を鑑みると、「構想力」「全体知」「総合エンジニアリング」等の劣化は否めない。そのギャップの現れが「不祥事の繰り返し」なのかもしれない。まさに、問題は根深く構造的である。

▼土砂崩れの9割は林業が原因 政府が誘発する皆伐を推奨 2021.7.7 07:00 AERAdot.
<https://dot.asahi.com/wa/2021070600048.html?page=1>

タイトルの表記がおかしいが、要するに令和2年7月豪雨による熊本県の球磨川の氾濫を例に「政府が推奨する皆伐が土砂崩れを誘発」と云う記事である。この被害を調査している自伐型林業推進協会の中嶋健造代表理事が「土砂崩れが始まった場所のほとんどは森林が大規模に伐採された『皆伐(かいばつ)』の跡地。森が保水力を失って表土がむき出しになり、土砂災害を誘発したと考えられます」と云う。その背景に、「木材自給率50%を目標」に掲げ、「自給率目標を達成するため、政府は巨大な高性能林業機械に多額の補助金を出し、事実上、皆伐を奨励しています。高性能林業機械を使うには幅の広い林道や作業道が必要で、それが崩壊の原因の一つになっています」とのこと。最近、熱海市の山の盛土によるとされる土石流災害や、太陽光パネル設置のための森林伐採も報じられている。居住地区の安全確保のための山(里山・深山)の保全・活用のあり方を雨の降り方が大きく変わった今、改めて見直す必要がある。
関連：野口健氏が全国的に広がるメガソーラー建設に警鐘「何か起きてから動かない国の姿勢に憤りすら感じる」 2021年07月07日 14時13分東スポ <https://bit.ly/3BNahHO>

▼農地法に挽歌を(3) 山下 一仁 研究主幹 キヤノングローバル戦略研究所 『週刊農林』
第2452号(7月5日)掲載 2021.07.21 https://cigs.canon/article/20210721_5934.html

元農水官僚(ガット室長、農村振興局次長などを歴任)による農地法に関する論説である。戦後間もない1952年に成立した「農地法」以降の我が国の農政及びステークホルダーの動きを絡めた変遷というか変質、頓挫の流れが紹介されている。(読むうちに、田舎の実家近くに建てられていた「耕地整理の碑」を想起。住所にも「耕地整理」が入っている) 結局、今に至るも、新規参入規制が厳しい農地法により、「農家の後継者しか農業の後継者になれない。」「新規参入がなければ農家は高齢化する。その原因を作っているのが農地法である。」と云う。人口構造、産業構造、都市・農村構造が大きく変化し、今後も加速することが予測される中、中山間地を含めた農地をどうするのか、わが国全体の土地利用法制、国土形成に関わる重要な問題である。農業・農地という局所的最適解がいつまで許されるのであろうか。[森林域：国土の約30%、農地：国土の12%] 結果的事象として、農地は守られず、耕作放棄地が拡大し、流域の貯水能力は喪失し、国土の荒廃、地方創生の障壁にもなっている。これまた、構造的、大局的に考えるべき問題である。まさに、農地問題は歴史問題であることを再認識させられる。

▼政策課題分析シリーズ 20 新しい働き方と地方移住に関する分析 ―コロナ禍における働き方への意識の変化をもとに― 令和3年7月 内閣府政策統括官(経済財政分析担当)
<https://www5.cao.go.jp/keizai3/2021/07seisakukadai20-0.pdf>

本稿は、これまでなされていなかった「移住実施者を含む個人と企業側の双方に行ったアンケート調査をもとに定量的な分析を行い、テレワークが地方移住を促進する可能性を確認するとともに、テレワークをきっかけとした地方移住の特徴を明らかにした。」とする調査分析結果報告書である。「移住実施者の多くは非東京圏出身者で、テレワーク実施率が有意であり、『地域の食・文化』を重視」という特徴をあぶり出している。非東京圏出身者は、「半農半X」的なライフスタイルへの郷愁があり、それがテレワークの実践・普及により、実際にトライできているのではなかろうか。地方創生関係者には、この分析結果を読み込んで欲しい。

3. 寄稿：芸術・建築・歴史・ランドスケープが一体となったフランスの魅力 (田中徳壽 建築家、DPLG FRANCE、元北海道東海大学芸術工学部教授)

[本稿は、篠原康明 Japa 理事による田中徳壽氏へのインタビューを取りまとめたものである]

—何故、フランスに留学されたのでしょうか—

京都大学工学部・大学院建築系教室の上田篤先生の研究室に在籍していた時に住んでいたところがスイス系団体の支援で設立されていた「京都国際学生の家(HDB)」でした。そこは、2/3が留学生で、1/3が日本人で、上田研究室を2年で終えた後に、外国に留学することを考えていました。

当時、米国(ハーバード大、MIT 等)への留学を希望する人がほとんどでしたが、当初から、米国への留学の興味はありませんでした。というのは、東京育ちの私が、東京以外の初めての地が京都でして、京都と云う風景が自然とヨーロッパへの窓口になったのかもしれない。そして、イギリス、フランス、イタリアの3カ国から選ぶ予定でしたが、最終的にパリの街を選びました。パリの街に大変興味があり、フランスから来ている留学生に聞いたところ、エコール・デ・ボザール(École des Beaux-Arts)と言う歴史のある美術大学があると聞き、そこに決めました。パリという街と、パリの中にある建築の大学を選んだわけです。1971年のことです。

—フランスの建築家資格をお持ちとのことですが、それはどのような資格でしょうか—

大学修了の単位を取得した後に、フランスの国家試験を受験する資格を得て挑戦。「フランス政府公認建築家」という資格を取得しました。この資格は芸術的観点が重視されており、我が国の一級建築士とは概念が違っており、こうした点にもフランスの芸術性を追求する姿勢を感じています。

—日本の街、フランスの街をどのように評価されますか—

難しい質問です。日本の田舎の街は大変美しく、特にその昔、城下町として栄えたところなどその美しさには、たぐいまれな風景があります。これは、その街の人々と行政が力を多く注いでいることにあると思われれます。

フランスの田舎の街も美しく、大小はありますが教会が街の中心にあり、そこを基点に広がり、そして、田園風景へと連なっていくというのが普通です。

フランスの田舎と日本の田舎との相違は、山と海の違いです。何しろ、フランスは、西は大西洋までほとんど山はありません。北も同様です。南は地中海まで一部山がありますが、東はドイツ、スイス、イタリアの国境近くにアルプス山脈、ジュラ山脈がある位です。

一方、日本は島国で周囲は海に囲まれており、列島の中心には山脈が連なり、山と海の間わずかな地が、街となり、都市になっています。どこから見ても山は必ず見えますし、山に登れば海が見えます。東京の中心から、山々が見えないというのは日本の中では珍しい場です。

従って、フランスの首都圏と日本の街はその在り様が大分違います。そして、日本の街は、自然の災害が風土に与えた影響が今も昔もあまり変わっていないように思えます。

一方、フランスの首都パリは、ここ 200 年~300 年の間、基本的に大きな変化はありません。オスマン(Georges-Eugène Haussmann : 政治家。1853 年から 1870 年までセーヌ県知事)が古い街のパリから、社会設備(道路、下水道等)や景観を整備して、今のパリを創りました(パリ改造)。パリは東京の山手線の内側位の広さで、500m 歩けば地下鉄の駅があると云う所です。

ーフランスが美しい街という高い評価を受けているのは何故でしょうー



ヴァヴァン通りのアパートマン。アンリ・ソバージュ設計。1912年。上層に向かって階段状をなすスタイルは軽快で、タイルの装飾的な扱いとあわせて、アール・デコ建築のひとつの形をなしている。

少し歴史の話をしますと、フランスの建築の師は紛れもなくイタリアで、時の王侯貴族はイタリアを「素」としていました。イタリアは、ローマ時代から続く文化的な遺産が多く、ヨーロッパの中でも中心的な存在でした。

フランス王国の出現により、フランス的なものがすこしずつ出来上がっていきます。しかし、文化に国境はなく、日本からヨーロッパに行きますと、イタリア、フランス、スペイン、特にキリスト教文化圏ではその街並みはとても似ているものがあります。

そして、お尋ねのフランスの美しい街並みが評価を受けている点について、これは特に感じるがありますが、古いものをとても大事に美しく使い、それらをうまく表現していくと云うことです。修理、保存をしながら新しくしていく「温故知新」です。

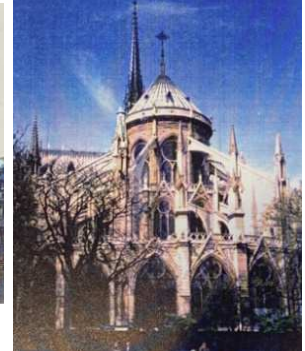
一つ例を上げれば、私が大学の教員をしていた頃、学生 18 名を連れてパリに行ったことがありました。ノートルダム寺院に行った時、丁度ミサの時間で、入り口からかなり遠くで、グレゴリアン聖歌隊が歌うもとの、司祭がミサを行っておりました。1m、2m、それよりも厚い石の壁で囲まれた何十メートルもの高さの中で、ステンドグラス越しの光の空間の中で、何人かの学生が言葉なく涙を流にじませていました。建築の時空と宗教の流れに、ともにみんなと一緒にいられる喜びを感じました。

もう一つは、私が通っていた大学(ボザール)に連れて行った時でした。そこに図書館がありましたのでそこを見せに行きました。図書館といっても近代的な図書館ではなく、壁にはギリシヤの哲学者や賢人が描かれた大きな絵がいくつも飾ってあり、本は古い皮表紙のものが様々(図表の本などは 1m×2m の大きなものまで)です。机には革が貼ってあり、スタンドで灯りを取り、

天井は高い。まるで、学生はタイムスリップして、中世のヨーロッパに入ったのではないかと云うような顔つきを皆がしていました。



オペラ座正面



ノートルダム寺院 後陣 フライング・バットレス



ノートルダム寺院 内部 ろうそく



ノートルダム寺院 内部 大理石の手すり

質問の一番良い答えがここにあるように思えます。街並み、街、考え方、哲学、思想を想う時、このような図書館を現在でも残し、そして現在でも学生たちに使用させている風景があるということは、何を発信しているのか。彼ら彼女らは体の中に「深く忍ばせる」ことができる、そして、次に「移行」していく流れがここにあると云うことです。

一帰国後、北海道にも居られたそうですがどのような仕事をされていたのでしょうか。

フランスでの経験で見方が変わりましたかー

北海道東海大学旭川校舎 芸術工学部建築学科教授を拝命し、ランドスケープ LAND SCAPE(風景・景観)を担当致しました。北海道のこの地で、この分野を担当することは最もふさわしいと思ったからです。

私が北海道で一番感じたことは、やはり自然です。私は 22 歳まで東京、その後、京都で 2 年間、その後パリで 8 年、そして東京と北海道です。

芸術工学部の校舎は旭川盆地の一角にあります。旭川市内を眼下におさめ、その向こうには大雪山の連峰を望むことができます。5つの川の合流点がキャンパスの山の下で結ばれ、南の方に流れて行きます。その昔、アイヌの人達が交易と監視をする重要な場でした。すべてのキャンパスがランドスケープの教材そのものでした。学生たちには、この景観・風景の中からこの地の歴史、空気、光、風を学んでもらいたいと伝えました。そして、君たちが新たな景観の仕事をする時、その地のいろいろな要素の中に、おのずから全ての答えが秘められている、と云うことを、教室の窓の外の風景を感じながら伝えました。

4. 稽古照今・寄稿：たのし歌謡談義 その3

(作詞・作曲家 高橋育郎)

いまの演歌むかしの演歌(その二)

[2014年11月(平成26年)記]

NHKが昭和六十年に放映した大河ドラマ「春の波濤」をご覧になった方は多いと思います。主人公は、我が国女優の第一号になった貞奴でした。(松坂慶子)彼女の旦那様は川上音二郎<中村雅俊>でして、劇中、彼が高座や辻々でやっていた「オッペケ節」が、それこそ演歌だったのです。オッペケペッポーペッポッポーと景気良く囃し立てて唄うその唄は、聴衆を踊りの渦にまきこみ、民衆は熱狂的に迎え入れました。頃は明治二十四年、音二郎は一躍スターダムにのしあがり、ブームとなって全国に広がりました。

時は遡りますが明治十一年、板垣退助など征韓論に破れて下野した旧参議が愛国党を結成し自由民権運動が始まりました。この運動に共鳴した若者、書生たちは思想普及のため、辻々に立って大声をはりあげピラを撒き、辻説法で通行人に呼びかけました。彼らを人々は「読売壮士」といい、その呼びかけを演説という新語で呼ぶようになりました。しかし、演説だけでは、なかなか人々の耳目をかきたてない。そこで演説に節をつけて唄い囃すようになってきました。

当時、政府は早く欧米諸国に追いつこうと西洋文明をとり入れることにおおわらわでした。日比谷に鹿鳴館を建て西洋人を招いては毎夜ダンスにあげ暮れ、いわゆる鹿鳴館時代を現出させました。

彼ら壮士は、そうした人種を横目でにらみ、

民権論者の涙の雨で
磨き上げたる大和魂

国利民福増進に
民力休養せ
若し成らなきゃ ダイナマイトどん

という「ダイナマイト節」や「やっつけろ節」などの唄をうたい、なおかつチラシを配ったのです。その木版画のチラシには「壮士自由演歌」と書かれていて、これが「演歌」になったのです。演説の原稿を歌詞にして面白おかしく節をつけて唄い、人々は面白がって聞いたのです。

このように演歌は演説する歌、政治批判の歌として、湧き上がるように産声をあげながら、全国をかけめぐり風靡していったのです。これが演歌発祥の話です。

しかし、こうして発生した演歌も、やがて日清戦争で軍歌が台頭し、政治批判は軍部らによる強力な弾圧に押しつぶされ衰退していきます。音二郎たちは何度も牢獄に放り込まれました。演歌士が歌っていた「00節」は、軍部に迎合して行き、一方で軍歌の影の存在として、苦学生

の一部の人たちはヴァイオリンを片手に持って辻々に立ち、世相やニュースを織り込んで唄いました。それらの歌はかつて人々を鼓舞するようなものでなく、抑圧された社会の底辺で、苦しい生活を余儀なく送る者たちの、物悲しくも哀調を帯びた怨歌ともいべきものに変貌しました。この人たちは演歌師とよばれ定着し、今日の「流し」へと引き継がれていきました。

昭和30年から40代にかけて新宿など都会の裏町には「流し」の演歌師がめだって出没していました。北島三郎は、そうした中から世に出ました。それが40年代後半、カラオケブームの影響で影をひそめていったのです。

話を戻しますが、政府は西洋文明の吸収におおわらわだったわけで、ミュージックを音楽と訳し、普及に取り掛かりました。明治十二年に、文部省は音楽取調掛といういかめしい役所を創設し、師範学校と合わせて小学校を設立。教科のなかに「唱歌」を取り入れ西洋音楽の基礎を教え始めました。

楽譜を知らない文部官僚が「唱歌」を確立するには、いかに苦労が大きかったか、想像を絶するものがありますが、「唱歌」の大部分は欧米諸国で誰でも知っているポピュラーなホームソング、あるいは賛美歌を採用しました。有名なところでは「蝶々」(ドイツ)「きらきら星」(フランス)「うつくしき」(のちの蛍の光、スコットランド)で、これら抒情性をもった旋律は、日本人に好まれるものであることが分かります。音楽といえばドレミファで表示されるものばかりになりましたが、明治の教育が日本の伝統音楽を完全にシャットアウトしたせいです。

明治以降の日本では、江戸時代から受け継がれた学校では教えない「00節」などの俗謡と、文部省が採用した西洋音楽が入り混じっていましたが、実は音楽教育を始めたときに掲げた理想と目標は、日本人の手によって、新たに生み出す日本の音楽、いわゆる国楽の誕生をめざしたのです。そしてここに日本人の独自の芸術性に目覚めた、新しい日本の歌を確立しようと立ち上がった人たちが登場してくるのです。誰でも知っている滝廉太郎がその最初の人です。

そして、先ほどの貞奴は、パリ万国博(明治十一年)を訪れ、西洋演劇を学び、音二郎と結婚、川上一座を立ち上げて「オセロ」を上演。そして新劇を始めました。これが坪内逍遙、島村抱月によって引き継がれ、明治四十四年、帝国劇場が開設され、あの松井須磨子がイブセンの「人形の家」を初演し、大正になってトルストイの「復活」が上演されたのです。ここで忘れてならないのが、劇中で歌われた『カチューシャの唄』です。

カチューシャ可愛いや 別れのつらさ
せめて淡雪 溶けぬ間に
神に願いを ララ かけましょか

作曲は東京音楽学校卒業の中山晋平で、当時二十六歳の処女作でした。私が注目したいのは、最もアカデミックな教育を受けたにも関わらず、単なる西洋一辺倒にならない、日本人の持つ民族性、オリジナリティーを発揮したことです。

晋平は当時、抱月の家で書生をしていたのですが、抱月から劇中歌の作曲を依頼されたとき「我が国の俗謡と、ドイツリートの間をねらって、日本中の誰もが歌えるようなものを作れ」といわれ、晋平自身も大いに共感して作曲に当たりましたが、「神に願いをかけましょか」のところで行き詰まり、苦悶の末、ララ という囃子言葉を思いついたことが、神の啓示というべきか、彼の才能の開花をみるのですが、これが後の「晋平節」に通じていて面白く、まさに西洋音楽の衣装をつけた日本近代大衆歌謡、流行歌第一号になりました。その後も中山＝松井のコンビによる劇中歌は続きます。

ツルゲネフの「その前夜」では、華族詩人、吉井勇の詩による「ゴンドラの唄」（いのち短し恋せよ乙女・・・）で知られていますね。トルストイの「生ける屍」では、詩聖、北原白秋の「さすらいの唄」（行こか戻るかオーロラの下を・・・）など傑作が生まれました。

芸術至上主義のもとにはじめた新劇運動も、やがて普及のために大衆への迎合がはじまって、観客にアピールする歌を積極的に挿入しました。それがその後、映画主題歌を生み出すヒントになったわけですが、主題歌は興行成績を上げることに通じる結果になりました。

「さすらいの唄」のレコードの裏面には「今度生まれたら」があって「可愛い女子と寝てくらそ・・・」（白秋）というのがあり、文部省が問題視し、松井須磨子の出身地長野県などいくつかの県で発売禁止になったのです。ところがです。これがかえって逆効果で、売り上げが急増したとか。

さて、大正十年に田園抒情詩人、野口雨情が中山晋平と組んで、「船頭小唄」を発売しました。（俺は川原の枯れ芒 同じお前も枯れ芒・・・）と、貧しさに倒れそうな夫婦唄です。当時、第一次世界大戦直後の不況に立たされ、夢も希望も失った人々の心に、この唄はしみこんでいきました。レコードは演歌師の鳥取春陽によって吹き込まれましたが、むしろ辻々に立ってうたう演歌師のヴァイオリンの哀調を帯びた音色と共に広がっていったのです。これこそいまの演歌に結びつく、演歌のはじめといえるでしょう。

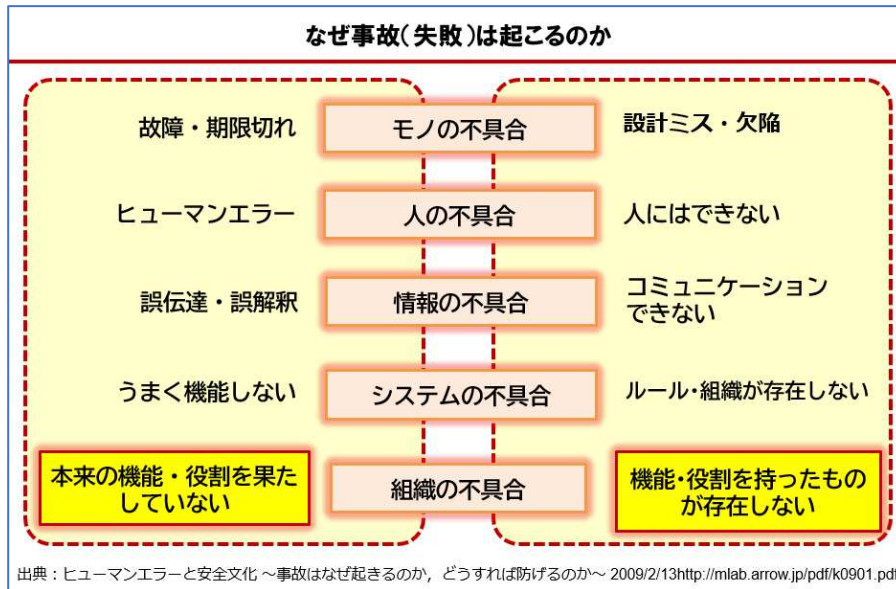
やがて昭和になってラジオ放送が始まると、歌の世界はぐんと幅を広げ、流行歌が本流となり、タンゴやシャンソンなど外国曲がうたわれてバラエティーに富んできました。本来の演歌は、一部の演歌師にのみの存在になり、私が少年期によく聞いて憶えているのは、「熱海の海岸散歩する 寛一お宮の二人連れ・・・」（尾崎紅葉の『金色夜叉』）とか。

石田一松の「のんき節」（のんきな父さん お馬の稽古・・・ハハのんきだね）などでした。演説の歌から発生した演歌は「エンカ」という発音のやわらかなイメージから、いまの演歌あるいは怨歌、艶歌にぴったりくる命名で、これまた面白いといわざるをえません。そんなところから、いまの演歌を演歌としたゆえんがあったのかもしれない。

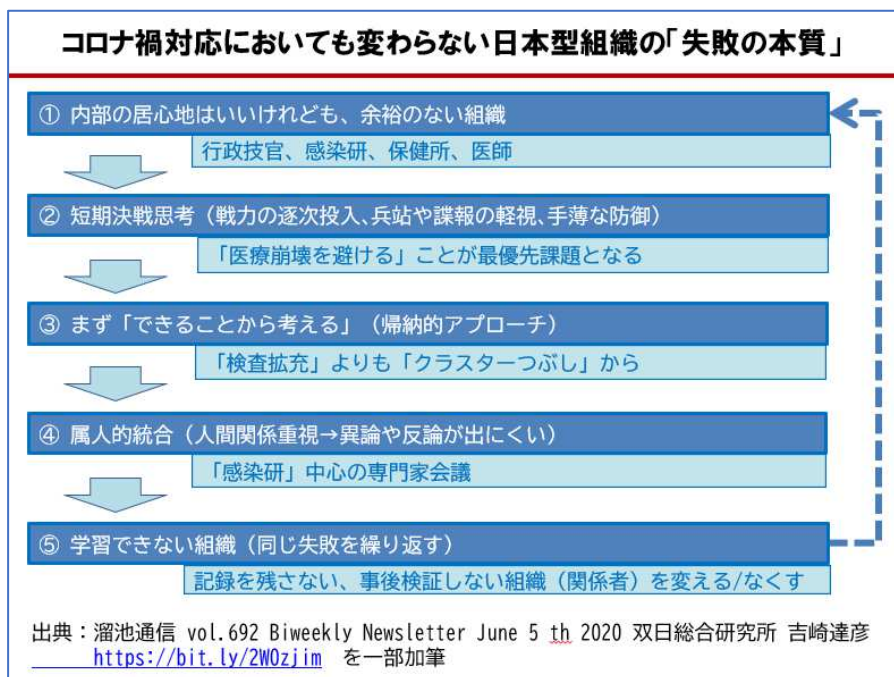
（完）

5. 解説：なぜ、不祥事は繰り返されるのか、「失敗」とは

企業・組織においてなぜ「不祥事(事故/失敗)」が繰り返されるのか、その一つの解題が下図である。



そして、「失敗」を語る際に、常に参考にされるのが「失敗の本質 日本軍の組織論的研究」(1984.5月発行) <https://bit.ly/2VdzxW9> である。



企業の不祥事に詳しい郷原信郎弁護士は、繰り返される企業不祥事を「カビ型問題行為」と呼び、「組織の利益のために、組織の中で長期間にわたって恒常化し、何らかの広がりをもっている行為。通常のコンプライアンス対応による発見が困難であること、組織内での自主的な自浄作用を働かせることが難しい」と云う。

出典：日本の企業不祥事の特質 郷原信郎 <https://goo.gl/rbgPM8>

6. Blog 仕組みの群像：不都合な事実の諸相

近年、勝手はあり得なかったような事態「不都合な事実」が相次いでいる。逆の意味で常態化している。国としての構造的な劣化ではないかと危惧される。次から次へと起こる事態に流されるなか、当事者を異動させ、組織を改廃し、忘れ去られていくことに対して、いささかなりとも今後を活かすべくアーカイブとしてブログにアップした。

▼Blog 仕組みの群像：不都合な事実の諸相

<https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>

7. 「Japa 新型コロナウイルス感染症特設コーナー」からの pickup 情報

Japa は、コロナ禍の発生を受け、2020年4月13日に「Japa 新型コロナウイルス感染症 特設コーナー」<https://www.japa.fellowlink.jp/blank-25> を開設し、爾来、アーカイブすべき情報をキュレーションし、随時アップしている。今月号より、前月1ヶ月間の中から pickup 情報を紹介する。

▼社会生命科学の学際的考察：新型コロナウイルス感染症 ワクチン接種の課題 独立行政法人 経済産業研究所(RIETI) 藤井大輔2021年7月3日 独立行政法人 経済産業研究所(RIETI) パスツール財団・パスツール研究所・日仏会館・RIETI・京都大学共催セミナー プレゼンテーション資料 https://www.rieti.go.jp/en/events/21070301/pdf/p2_fujii.pdf

▼古代ギリシャ、アテネの黄金時代に終止符を打った謎の疫病 紀元前5世紀、終息までに市民の3分の1近く、7万5千~10万人が死亡 2021.07.25 NATIONAL GEOGRAPHIC <https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/21/053100266/?P=1>

▼アングル：デルタ株が覆すコロナの概念、規制社会に逆戻りも By Reuters Staff、JULY 28, 202111:34 <https://www.reuters.com/article/delta-covid-idJPKBN2EXOHL>

8. 読者の声

[読者の声] いつも配信ありがとうございます。

とくに、(7月1日号)10ページの「安全とリスク」興味深く拝見しました。

BSE事件のころから、リスク評価、リスク管理、リスクコミュニケーションが随分と報じられたにもかかわらず、旧態依然、懲りない社会です。

ところで、「安心・安全」を英語ではどう言うのでしょうか？

海外の方々が「安心・安全」とセットで発言しているとは思えませんね。(W.Y.)

(編集者からのコメント) 上記の問いかけに関して、海外生活の経験があり、ビジネス英語の講師でもある Japa の特別会員(K.Y.)の方に確認したところ、下記回答を頂いた。

「安心・安全」を英語で言おうとすると、

safe and secure,

safety and security

ですが読者の方も指摘されているように、「安心」に対応する言葉は英語では含まれていません。

私の考えとしても、「安心」は提供できることが保証されるものではなくて、政治家や企業が感覚的な、単なるゴロのいい言葉として日本だけで使われていると思います。

すでに調べられていると思いますが、以下の記事が参考になります。

▼**食の安全安心 日本と海外の違い** <https://www.food-export.jp/anshin/>

食の安心をアピールするのに一番使われる方法は、顔が見える・・・という方法です。農産物のお店に生産者さんのお写真が掲載されている・・・という日本ではおなじみの光景です。しかし、これって性善説の特殊な日本でしか行われていなくて、海外ではほとんど行われていません。

その理由は、食の安心という考え方にあります。食の安心を英語で言うとどうなるかご存知ですか？食の安全は、Food Safety です。世界共通で使われる言葉です。食の安心には英単語がありません。中国語もありません。放心とかいて近い意味のようですが異なります。食の安心という言葉は日本にしか存在しないのです。そんな日本にしか通用しない概念を世界に売るときに使おうとする食品メーカーさんがいます。そもそも訳もできないのに、どうやって伝えるのでしょうか？

▼#101 『安心・安全』の英語は本当に safe and secure? <https://www.evocablog.com/safe-and-secure/>

「安心」を「信頼できるから安心」と考えて reliable (信頼できる) や reliability (信頼性) と表現できる場合がありますが、食べ物自体をそう表現すると「食べ物は壊れたり故障するものではないので何が言いたいのか分からない」と感じるネイティブスピーカーが多いため、食べ物の「安心」に reliability は使わないほうがいいでしょう。似た意味の trustworthiness (信頼性／信用性) も不自然さがあります。

一方、「安心」を「保証／確約されているから安心」と考えて assurance (保証／確約) と表現できる場合もあり、例えば「食の安心・安全」が「食べ物が安全であり、それを確かだと約束してくれること(によって安心できること)」を意味するのであれば、それは food safety and its assurance と表現できます。もし単に「食べ物が安全であること(によって安心できること)」という意味であれば food safety だけで十分です。

最初の「安心・安全」の例には「暮らしの安心・安全」もありましたが、これも単に「安全に暮らせる地域社会(によって安心できること)」を意味するのであれば、「安心」の部分は省いて safe community と表現するだけでいいでしょう

(この場合は secure を使わず safe だけで犯罪など意図的な危険に対する安全も意味します)。なお、「暮らしの安心」は「不安のない安定した暮らし」と考えれば secure life と表現できます。

「安心(感)」に該当する英語には他にも (a sense of) reassurance (他者からの言葉や行動によって与えられる安心(感))、(a sense of) relief (ほっとするという意味での安心(感))、peace of mind (心の平安) などがありますが、これらを safety/security と一緒に使おうと

すると逆に不自然になってしまうと思います。

結局のところ、安心の理由が明確な場合は「安全(だから安心)」「信頼できる(から安心)」「高品質(だから安心)」のように理由を説明するだけで普通は十分でしょう(それだけで安心できることまで意味します)。

9. Japa 及び連携団体からのご案内

▼第8回 Japa フォーラムを下記の通りオンライン開催しました。

- 開催日時：2021年7月21日(水) 15:00~17:00
- 論点提起：コロナ渦で見てきた日本の仕組みと態勢の再考

～デジタルの視点から見る～

小畑きいち(Japa 理事、青山学院大学元客員教授)

その開催報告を Japa 日本専門家活動協会の HP <https://www.japa.fellowlink.jp/japa> に掲載しています。外資系情報企業、そしてアカデミズムに転じ、デジタルの世界に通じた論点提起者による興味深い資料を御覧ください。掲載資料に関するお問い合わせ等があれば、info@japa.fellowlink.co.jp まで連絡ください。

▼Japa は、会員(正会員、一般会員)、連携団体を随時募集しています。

Japa はより多くの方々が会員として交流・連携・共創できることをめざして、そして、Japa の活動にご支援賜りたく、新たに「一般会員」(年会費3千円)枠を設けました。

入会金無料のいま、ぜひ、入会のご検討を賜れば幸甚に存じます。

入会に関するお問い合わせ先：Japa 事務局 info@japa.fellowlink.co.jp

10. つぶやき (編集後記に代えて)

コロナ禍の中、TOKYO2020 が高揚感なきまま始まった。五輪招致の不正疑惑、新国立競技場の設計変更、エンブレムの盗用問題・再公募、コロナ禍下での開催の可否等々、そして開会式直前になっても開閉会式演出チームの辞任・解任が相次いだ。しかし、開催されるやいなや、すべて忘れたかのような感動仕立てのメディア報道。大谷翔平の活躍のニュースも霞む。一方で、夏休みの帰省も加わり、「予想通り」の感染拡大が生じている。緊急事態宣言下にあることを忘れるような雰囲気・行動実態に、「パンとサーカス」を想起するのはなぜだろうか、・・・。

編集発行人：Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

問合せ・連絡先：info@japa.fellowlink.co.jp

発行元：Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>

Copyright © 2021 Japa 日本専門家活動協会